
支援会話集

レトナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

支援会話集

【Nコード】

N2167B

【作者名】

レトナ

【あらすじ】

聖戦、紋章、トラキア、封印、烈火とオールマイティに創作してく予定

アルテナ&フィー（前書き）

聖戦の、飛行系二人の会話でございますー。

アルテナ&フィー

アルテナ&フィーC

「フィー」

アルテナさ〜ん！

「アルテナ」

あら、フィー。どうしたの？

「フィー」

私達ってつくづく弓兵に狙われやすいと思わない？

「アルテナ」

そうね、でもそれは仕方が無いんじゃないかしら。

フィーはまだいいと思うの、私は魔道士にも狙われるから…

「フィー」

ドラゴンは、魔法に弱いのか？

「アルテナ」

ええ、ペガサスと違って、魔力を持つ生き物ではないから

「フィー」

分かったわ。アルテナさん、魔道士が来たら私が守ってあげるから！

「アルテナ」

ふふっありがとう、フィー

アルテナ&ファイバー

「アルテナ」

ファイバー、この前はありがとう。貴女とマーニャのお陰で助けられました

「ファイバー」

へへっ私だってアルテナさんにたくさん助けてもらってるから当然よ。

アルテナさんで、強くてカッコよくて羨ましいな。

特にゲイ・ボルグを持って戦う姿、まるで伝説に出て来るノヴァみたい

「アルテナ」

そ、そうかしら？

「ファイバー」

うん！アルテナさんは、誰を目標に訓練していたの？やっぱりノヴァ？

「アルテナ」

いいえ…私は、父と兄かしら。ファイバーは？

「ファイバー」

私はお母様と伯母様かな。二人ともシレジア四天馬騎士だったの

「アルテナ」

まあ。貴女なら、きっとなれるわ。同じ飛行系同士、頑張りましょうね

「フイ」
うん！

アーサー&ユリア（前書き）

アサユリ会話です

アーサー&ユリア

アーサー&ユリアC

「アーサー」

君、ユリアだよな

「ユリア」

は、はい…あの、貴方は…？

「アーサー」

びっくりさせてごめん、俺はアーサー

「ユリア」

アーサーさん…何かご用でしょうか？

「アーサー」

アーサーでいいよ、特に用って訳じゃなかったんだ。

ほら、この軍って魔法を使える人が少ないから、何となく

「ユリア」

はい…確かにそうですね。私も、魔法を使う方と話せて嬉しいです

「アーサー」

ふーん、君って大人しいんだな。何だか妹みたいだ、ほら、俺達髪の色も似てるし

「ユリア」

くすっ…そんな事を言われたの、初めてです

アーサー＆ユリアB

「ユリア」

…あの…お怪我はありませんか

「アーサー」

うん？大丈夫だよ

「ユリア」

私…アーサーといると、何故かとても温かい…懐かしい気持ちになるのです

「アーサー」

そうか。でも、俺よりセリス様の所へ行った方がよくないか？

「ユリア」

そんな…どうして…

「アーサー」

君は、セリス様とよく一緒にいるじゃないか。まるで恋人同士みたいだ

「ユリア」

アーサー…いえ、何でもありません…ごめんなさい…

「アーサー」

あつユリア、待ってくれ！

「ユリア」

え？

「アーサー」

ごめん、ユリア…俺、君とセリス様があんまり仲いいから…
あんな事を言うつもりはなかったんだ

「ユリア」

よかった…では、また話しに来ていいですか？

「アーサー」

もちろんだよ。いつでもどうぞ

アーサー＆ユリアA

「アーサー」

ユリア、大丈夫かい？そんなに震えて…

「ユリア」

は、はい…アーサー、お願いします、側にいて下さい。私…不安なのです

「アーサー」

大丈夫さ、ちゃんとついてるから。

俺、ずっと前から君の事、可愛い子になって、守ってあげたいって
思ってたんだ

「ユリア」

…嬉しい…とても…とても嬉しいです

「アーサー」

俺、セリス様以上に君に頼って貰えるよう頑張るからさ、
こんな俺でよければ、これからも一緒にいてくれないか？

「ユリア」

はい…私、幸せです…

ガイツ&ギース（前書き）

兄弟会話です。ガイツとギースの仲はよかったんじゃないかと思ひます

ガイツ&ギース

ガイツ&ギースC

「ギース」

兄貴、海賊って？

「ガイツ」

海賊ってのはまあ、読んで字のごとく海で暴れる連中の事さ。
普通は男だが、たまに女海賊もいる。

「ギース」

本で少し読んだが、北の国の入り江に出没した海賊は、角兜に斧を持ってるんだよな。

「ガイツ」

まあ、そういうイメージが強いだろうが、実際は鎖鎧に長剣を装備していたらしいぜ。

しかも、そいつらは商船ではなく沿岸の町を襲った連中だ

「ギース」

ふ〜ん。他にもいるの？

「ガイツ」

ああ、色々な種類の連中がいるぜ。

まあ、お前の言った海賊が有名どころだがな。そいつらの戦法を知ってるか？

「ギース」

いや、知らない。

「ガイッ」

襲撃の際は、機動性がある船で入り江から突然姿を現して襲うといった

奇襲戦法を好んで用いる。風のをきを狙えば敵船は移動することができないしな

「ギース」

やばい時にはどうするんだ？

「ガイッ」

やばいときには、さっさと櫂をこいで逃げれば逃げられたようだ。うまく敵船に乗り込めば、白兵戦では大抵勝利を収められたらしい。

「ギース」

でも、何で海賊なんかになるんだろう？

「ガイッ」

ギース、ほとんどの海賊つてのは耐えがたい貧しさのせいで海賊行為に走る。

そうじゃない海賊なんざ稀だ、この事を忘れるんじゃないぞ

「ギース」

うん

「ガイッ」

俺達だつて今は安定した暮らしをしているが、この先何が起こるか分かったもんじゃない。

お前が海賊になるような羽目にならなきゃいいんだがな・・・。

ガイツ&ギースB

「ガイツ」

おっギース。

「ギース」

兄貴・・・。

「ガイツ」

どうした、元気ねえな。

「ギース」

また、親父と喧嘩か？

「ガイツ」

お前が心配するような事じゃねえよ。ただちつとばかり…話が合わないだけだ。

「ギース」

そうだ、教えて欲しい事があるんだけど。私掠船ってのは何だ？

「ガイツ」

ああ、それはな、戦争する時に国から「敵国の商船を襲っても良い」といった内容の委任状をもらい、商船から掠奪を行える船の事だ

「ギース」

国が、海賊行為を認めるのか？

「ガイツ」

まあ、国にとっては安く海軍力が手に入るしな。

乗組員も商船や軍船で働くより良い待遇が受けられたらいいぜ。

私掠船の船長の中には、騎士の位を手に入れたものもいるぐらいだ

「ギース」

へえ、兄貴は物知りだな。

「ガイツ」

そうか？お前こそ、ちゃんと勉強してんじゃねえか。親父が褒めてたぜ。

「ギース」

そうか？・・・あのさ、兄貴、どこにも行かないよな？

「ガイツ」

あ？いきなりどうしたってんだ？

「ギース」

別に…

パント&クラリーネ（前書き）

親子会話です。実はルトクラへの布石だったりします。

パント&クラリーネ

パント&クラリーネC

「クラリーネ」

お父様、お父様。

「パント」

何だい？クラリーネ。

「クラリーネ」

お父様はとくても物知りですけど、あまりそれをご披露しては下さないのね。

「パント」

そうだね、知識は、必要な時以外見せびらかすものではないから。

「クラリーネ」

お父様、知りたいと思う事は仕方ありませんけれども、余り書庫にこもるのはお止め下さいませ、お母様が悲しみますわ。もちろん、私も淋しいんですよ？

「パント」

ははっこれは痛い所を突かれたな。それでも随分治ったんだが

「クラリーネ」

お父様はまだまだお強いのに、どうして魔道軍将をお辞めになりましたの？

「パント」

私の後はセシリアがちゃんと継いでくれると思ったからだよ。
人間、引き際が肝心だからね。

「クラリーネ」

そうですね……。セシリア様……。とても素敵な方ですね。
セシリア様のお姉様、プリシラ様もとてもよくして下さいますの。
もちろんプリシラ様の旦那様であるエルクもですわ。

「パント」

そうか、それは良かった。

「クラリーネ」

ねえお父様、またナバタの不思議なお話や、勇ましいディークのお話、聞かせて下さる？

「パント」

ああ、もちろんだとも

パント&クラリーネB

「クラリーネ」

はあ……。

（パント現れる）

「パント」

どうしたクラリーネ、ため息などついて。

「クラリーネ」

あら、お父様。

〔パント〕

もしかして、気になる殿方でも出来たかな？

〔クラリーネ〕

ま！違いますわ。今の所、お兄様以上の方はいらっしやいませんもの。

もちろん、お父様以上の方もですけど。

〔パント〕

はははっ今はそうかもしれないけれど、
お前もいつかは誰かのところへ行ってしまうのだろうな。そう考えると淋しいものだ。

〔クラリーネ〕

お父様ったら、まだまだ先のお話でしょう？

〔パント〕

そうだね。でも、恋をする事は大切だぞ？そのお陰で、私はルイーズのような素敵な女性と出会えたのだから。

〔クラリーネ〕

はい、お父様。

そのお話でしたら、何度も何度もお耳にタコが出来るぐらい聞かされましたわ。

〔パント〕

おや、そうだったかな？

「クラリーネ」

ええ。でもご安心下さいな。平民に恋する、なんて事だけは絶対に
ありませんわ

ルトガー＆ルウ（前書き）

ルトガーは子どもには悟られないように優しいと思います

ルトガー&ルウ

ルトガー&ルウC

「ルウ」

わっ

「ルトガー」

！

「ルウ」

あ、ぶつかってごめんなさい、お兄さん

「ルトガー」

…何故…子供がここにいる。危ないから、下がっている

ルウ

僕も戦っているんだよ。だから、頑張らないと。

「ルトガー」

戦う？どうし…

ルウ

ところでお兄さん、こんなのを拾ったんだけど、見てくれる？

首飾りみたいなんだけど…この光る細い棒みたいなのは何？

「ルトガー」

…これは、三角楊枝だな

ルウ

三角楊枝？

「ルトガー」

貴族連中の間では、そのように首飾りにしたり、象牙や鼈甲製の楊枝入れを持つたりすることが流行している。どこかの貴族が落として行っただろう。しかし…金銀の細工も見事なものだ。まだ新しい

ルウ

そうなんだ。落とした人、困ってるかな？

「ルトガー」

…お前に恵んでくれたと思えばいい。

ルトガー＆ルウB

「ルトガー」

…おい

ルウ

あ！お兄さん！

「ルトガー」

ルトガー

ルウ

ルトガーさんって言うんだ。えっと、僕はルウ

「ルトガー」

ルウ、お前は…何故、戦う？

ルウ

僕が戦うのはおかしいかな？

僕は僕の育った孤児院を、親切な院長先生を殺したベルンが憎い。

それに弟のレイや友達の子ヤド…大切な人を守りたい。だから、戦うんだ

「ルトガー」

そうか…

ルウ

心配してくれて、守ってくれてありがとう、

何度か庇ってくれたでしょ。ルトガーさんは優しいね

「ルトガー」

そんな事は…

ルウ

無いわけ無いと思うよ。

だって、本当にどうでもよかったら、僕みたいな子供に話しかけたりしないよ

「ルトガー」

……………

ルトガー & ルウ A

(空白)

皆をやった奴も、その仲間も全て始末する…

その時にお前達がこれまでやってきた悪事を…悔い改めて、眠れ

「ルトガー」

………

ルウ

ルトガーさん？

「ルトガー」

！…ルウ

ルウ

ああ良かった、いつもの優しい目だ

「ルトガー」

無事か

ルウ

うん、ありがとう！…ルトガーさんて、何だか父さんに似てる

「ルトガー」

？

ルウ

僕の両親ね、4歳の時にいなくなっただ。だから顔とか少ししか覚えてないけど。

でも、さり気なく側にいてくれる所とか、静かな雰囲気とか。

それにね、父さんは強い剣士だったって母さんに聞いたことがあるんだ

「ルトガー」

そうか…

ルウ

だから、ルトガーさんの側にいると何だか懐かしくて。あつごめんなさい、迷惑かな？

「ルトガー」

構わん、俺も、お前が側にいると心が休まる

フィー&ティニー（前書き）

ティニーの兄アーサーを、フィーが乗せて来たところを見て、ティニーと絡めたくて思いついた会話

フィー&ティニー

フィー&ティニーC

「フィー」

あらっ 貴女のその赤いリボン、可愛いわね

「ティニー」

あ、ありがとうございます。あの、貴女は…

「フィー」

私、フィーよ

「ティニー」

私はティニーです。宜しくお願いします、フィーさん

「フィー」

そんなに緊張しないで、フィーでいいわ

「ティニー」

はい！

「フィー」

ねえ、貴女のそのリボン、どこで買ったの？

「ティニー」

これは、私の母がつけていた物なの。フィーのイヤリングも素敵ね

「フィー」

うふふっこれ、私のお母様がお父様から贈られた物なんですって

フィー&ティニーB

「フィー」

ティニーがアーサーの妹さんだったのね

「ティニー」

うん、フィーは兄様をイザークまで送って下さったんですってね

「フィー」

ええ、そうよ。・・・ところで、貴女はどうして戦おうと思ったの？

「ティニー」

強くなりたいの。私、弱虫で逃げてばかりだから。それにお母様の為にも…フィーは？

「フィー」

私は、最初はセティお兄ちゃんを探す為だったのよ。

お母様の為に、お父様を探すって言ったきり帰って来なくてさ…

「ティニー」

まあ、フィーがセティ様を探しに？私達と反対ね

フィー&ティニーA

「ティニー」

ね、フィーもセリス様にお会いしたかったの？

「フィー」

うん。私ね、小さい頃にセリス様のお父上シグルド様の話を、お母様から聞いて、憧れてたの。

それでシグルド様のご子息はどんな方かと思ってた。ティニーも？

「ティニー」

ええ、噂は聞いていたから、どんな方なのかなって…

「フィー」

何だか、私達って似てるよね

「ティニー」

本当にそうね。私、フィーとお友達になれてとても嬉しいの

「フィー」

私もよ、ティニー

ウォルト&ノア（前書き）

従兄弟会話です。ダーツ（ダン）の子ノアと、ダーツの妹レベッカの子ウォルト。てかウォルト関係の会話は全部料理な気が…

ウォルト&ノア

ウォルト&ノアC

「ウォルト」

初めましてノア兄さん！お会い出来て嬉しいです！！僕、ウォルトですよっ！

「ノア」

ウォルト…？

「ウォルト」

はい！ダン伯父さん達の事は、母さんからよく聞かされていました！

「ノア」

そうか、君が…成る程

「ウォルト」

？

「ノア」

ああごめん、いきなりだったもので、少しびっくりしたんだ

「ウォルト」

！そうでした！…突然ごめんなさい、僕兄弟いなくて、あなたが従兄弟だと思ったら嬉しくてつい…

「ノア」

いいんだ、俺こそ君に会えて嬉しい。どうか、宜しく

ウォルト＆ノアB

「ウォルト」

ノア兄さんはお腹すいてません？

「ノア」

そう言われれば少し…だが、戦っている最中だから我慢するさ

「ウォルト」

駄目ですよっ格言に「腹満たされずして心もまた満たされず」とあるでしょう？

「ノア」

そうだったか？

「ウォルト」

そうですよ。あ！よかったらこれ、どうぞ！母が作ってくれた、保存がきく手料理です

「ノア」

うーん…じゃあ、もらっていいかな

「ウォルト」

ええ、もちろんです。それよりお口に合うといいのですけれど…

「ノア」

とんでもない、本当に美味しいよ、ありがとう。

…君がいつも持ち歩いているその袋は、食料袋だったのか

「ウォルト」

はい、正確に言うと「保存食袋」なんです。

本当は父の物なのですけど、とても便利なんで譲ってもらいました

「ノア」

そうか、ロウエン叔父さんは騎士だけれど、

優れた料理人でもあるのだと父から聞いた事がある。

君の両親は二人とも料理が得意なんだね

ウォルト&ノアA

「ノア」

ウォルト！

「ウォルト」

あ！ノア兄さん！！

「ノア」

弓兵の君が前線に出る事ほど危ないものはない、俺の後ろで援護していてくれ

「ウォルト」

はい！

「ノア」

そうだ、この前のお礼にこれをあげる。多分、君には幾つあってもいいだろうから。

「ウォルト」

あつ弦と弓懸けですね！助かりますっありがとうございます…！

「ノア」

ああ。くれぐれも怪我しないように気をつけるんだぞ

「ウォルト」

何だか、ノア兄さんって本当の兄さんみたいです

「ノア」

そう思ってくれて構わないよ

「ウォルト」

本当ですか！？

「ノア」

もちろんさ。…この戦いが終わったら、また俺はイリアに戻らない
といけない。

頻繁に会うのはきつと難しくなると思う

「ウォルト」

そう…ですね…

「ノア」

だから、今の間は兄弟でいいと思うんだ。

俺も一人っ子だから、君のような弟がいると思うと嬉しいよ

「ウォルト」

今の間だけなんて…僕、会う回数が少なくなっても、これからその
つもりでいますよ

「ノア」

！そうだね、ありがとうウォルト

ダーツ&ノア（前書き）

親子会話でございます。

ダーツ&ノア

ダーツ&ノアC

「ノア」

父さん！

「ダーツ」

おう、ノア。

「ノア」

あつまたその宝の地図見てる。どう？財宝見つかりそう？

「ダーツ」

うゝん・・・今の所貿易業が忙しいからな。夢と現実を両方成功させるのは難しいぜ。

「ノア」

確かに、時間かかると思うよ。でも、夢を配るっていいよね。何か、わくわくするな。僕も応援するからね。

「ダーツ」

おっお前も分かるようになったか！

後は宝を見つけた時にファリナの奴に妨害されないようにしねーとな、

全く、夫婦と言えども油断できねえ。

「ノア」

あはは、父さんの夢は大きすぎるから。

そう言えば母さんに聞いたんだけど、父さんには妹がいるんだね。

「ダーツ」

ああ、レベツカの事か。

「ノア」

どんな人？母さんの姉さん達の話はよく聞くけど、レベツカ叔母さんの話は聞いた事なかったから。

「ダーツ」

すごくしっかり者で、料理が上手だぞ。おまけにお前より少し年下の息子がいる。
名前はウォルトと言ったかな。今も、リキアのフェレに住んでる筈だが。

「ノア」

そうなんだ！会いたいなあ。でもリキアか・・・遠いね。

「ダーツ」

そうだな、いつか会いに行けるといいんだが・・・。

ダーツ&ノアB

「ノア」

ねえ、父さん。

「ダーツ」

ん？

「ノア」

父さんにはどうして二つ名前があるの？

「ダーツ」

どう言う事だ？

「ノア」

ほら、ダンと、ダーツ。母さんはダーツって呼んでるけど、父さんの友達の中にはダンって呼ぶ人がいるから。

「ダーツ」

ああ、それはな、俺は一時期記憶喪失だった時があるんだ。ダンが本当の名前で、ダーツは記憶喪失の間につけられてた名前だ。だから、未だに記憶がはっきりしない所もあるんだが…まあ、そう言う事だ。

「ノア」

そっかあ！でも、どんな事を思い出せないの？

「ダーツ」

うゝむ・・・例えば、どうして今イリアにいるのか、とかな。

「ノア」

え！？

「ダーツ」

どうもその辺の記憶がはっきりしねーんだよ・・・。
気がついたらイリアにいて、いつの間にかファリナが嫁になっててよ。

「ノア」

と、父さん！？

「ダーッ」

はははっ嘘に決まってるだろ。お前がここにいるのがその証拠だ

ケント&ランス(前書き)

父息子会話でございます。ランスがエリウッドに拾われた事に、この会話が絡んでたらな……

ケント&ランス

ケント&ランスC

「ランス」

父上?…失礼しました、読書中でしたか

「ケント」

気にするな、どうした?

「ランス」

その本をよく読まれていますね、どなたの書かれたのです?

「ケント」

これは、高名な軍師の書かれた本だ

「ランス」

もしや20年以上前の戦いで、父上達をお助けしたと言う?

「ケント」

ああ…軍師殿の行方はとうとう分からなかったが、
書き記された膨大な資料が発見されてな。それを元に作られたものだ

「ランス」

そうでしたか。是非!自分にも読ませて下さい

「ケント」

ああ、もちろん

「ランス」

ありがとうございます！しかし、父上の本が…

「ケント」

心配ない、全部で24冊あるからな。どれからでも好きなだけ読みなさい

「ランス」

はい！ところで、父上はリキアの騎士でしたよね？

「ケント」

ああ、そうだ

「ランス」

どうして、栄誉あるリキア騎士の身分を捨ててイリアへ？

「ケント」

フィオーラと…彼女と出会って、彼女の祖国を思う心に打たれたのと、

このイリアの現状を目の当たりにして、微力ながら力になりたいと思ったのがきっかけだ。

ケント&ランスB

「ランス」

リキアにいた頃の、父上の主君はどのような方でした？

「ケント」

我が主君、キアラン領のハウゼン様は大変温厚で聡明で領民思いの立派な方だった。

そして、私が護衛の任に当たっていたハウゼン様の孫娘リンデイス様は、

気高さの中にも、臣下に対する細やかな心配りを忘れない…
聡明で心優しく、強く美しい方だった

〔ランス〕

成る程、素晴らしい方々だったのですね

〔ケント〕

ああ、この方々になら命を賭けられると心底思ったよ。

だが、残念な事にハウゼン様は亡くなられ、

リンデイス様のご両親も亡くなられていた為、その後をリンデイス様が継がれた

〔ランス〕

？ですが、キアランはオスティアに統合されたのでは？

〔ケント〕

キアランがオスティアに統合されたのをきっかけに、

リンデイス様はオスティアに統治を委ね、ご自分の故郷サカの草原へ帰ってしまわれた。

きつと、幸せに暮らされているだろう

〔ランス〕

リンデイス様は、サカが故郷なのですか？

〔ケント〕

ああ、サカでお生まれになり、草原を深く愛されていた

〔ランス〕

そうだったのですか…

「ケント」

お前も、素晴らしい主君に出会えるといいな。

…そして、私にとって最大の恩人は、フェレ公子エリウッド様だ

「ランス」

フェレ…リキア諸国の一つですね

「ケント」

そうだ。あの方がいなければ、

私はリンデイス様をお守りする事が出来なかったかもしれない。

エリウッド様には今でも本当に感謝している

ティーン&ユリア（前書き）

自分の出身地の事で盛り上がる二人です

ティニー&ユリア

ティニー&ユリアC

「ユリア」

ティニー様…

「ティニー」

あの、ユリア様、ティニーでいいです

「ユリア」

はい…では、ティニーさん。あの、私の事もユリアと呼んで下さい

「ティニー」

はい、ユリアさん

「ユリア」

ティニーさんはフリージの方なのですか？

「ティニー」

ええ、でも生まれはシレジアです。ユリアさんも？

「ユリア」

いえ…バーハラで倒れていた所をレヴィン様に助けて頂いてから、しばらくシレジアにいました

「ティニー」

そうですか、バーハラで…

「ユリア」

ティニーさんは…バーハラの都へ行った事があるのですか？

「ティニー」

はい、あの、よかつたらお話ししますけど…

「ユリア」

はい…お願いします

ティニー & ユリア B

「ティニー」

あの、ユリアさん

「ユリア」

はい？どうされたのですか？

「ティニー」

相談があるんですけど…

「ユリア」

私にですか？お役に立てるといいのですが…

「ティニー」

その、私…男の方と話すのが得意では無いので…
兄以外の方とは中々話せないのです。どうしたらいいのでしょうか…

「ユリア」

それは、私も苦手なのですが…セリス様は…誰とでも気さくに話して下さる方ですから…

ティニーさんからもつと話かけてみてはいかがでしょう？

「ティニー」

はい、そうですね…それならユリアさんも兄のアーサーに…

あの、ユリアさん。これから仲良くして頂けますか？

「ユリア」

ええ、もちろんです

ティニー & ユリア A

「ティニー」

ユリアさんは、シレジアのどの辺りに住んでいたのですか？

私は生まれてすぐフリージへ連れ戻されたので、覚えてないのですが…

「ユリア」

私は…シレジアの辺境にいました。周りには高い山がたくさんあって…

「ティニー」

もしかして、風の竜フォルセティ様が眠りについてると言つ伝説がある山ですか？

「ユリア」

ええ…

「ティニー」

私と母と兄も、その近くの村に住んでいたんです！

あの、ユリアさんはフォルティ様のお話聞きました？

「ユリア」

はい、レヴィン様から…

「ティニー」

私、フォルセティ様にお会いしたいなって思っていました。
シレジアに住んでいたら山へ探検しに行ったかもしれないねって
兄と話したりもしました。あ、ごめんなさいこんな話…

「ユリア」

いいえ、実は私も同じ事を思っていました…シレジアにいた間は、
フォルセティ様が私を近くで見守っていてくれるような気さえして
いました…

「ティニー」

ユリアさん、この戦いが終わって一段落したら、
私、兄と一度シレジアへ行ってみたいと思っています。
ユリアさんも一緒にませんか？

「ユリア」

そうですね…私も是非、一緒にできたらと思います…

ディーク&エキドナ（前書き）

ディクシャニも好きですが、このカプもかなり好きです

ディーク&エキドナ

ディーク&エキドナ

「エキドナ」

なあ、あんた。

「ディーク」

ん？

「エキドナ」

見ていて思ったけど、相当腕が立つね。

「ディーク」

そりゃどーも。あんたの腕だってかなりのもんだと思うがな。誰に教わった？

「エキドナ」

じいさんだよ。名前はファーガス。

「ディーク」

ファーガス？…ファーガスってのは、もしかしてあの有名な海賊団の？

「エキドナ」

そつさ、あのファーガス海賊団の頭だよ

「ディーク」

へえ、そりゃまた大物が出てきたもんだ

「エキドナ」

で、あんたは？

「デイク」

親父からさ。名前はロイド

「エキドナ」

ロイドだって！？

「デイク」

？ああ。それが、何か？

「エキドナ」

もしやベルンで語り継がれている、【黒い牙】の…まさか、ね

デイク&エキドナB

「エキドナ」

名前を聞いてなかったね、あたしはエキドナ

「デイク」

デイクだ

「エキドナ」

あんたって腕もさる事ながら、体格もいいね

「デイク」

そうか？この体格は多分じいさん譲りだ。

親父はそれほどでもなかったが、じいさんも親父の弟…叔父さんも

でかつたからな

「エキドナ」

なるほど。ところで、この戦いが終わったらどうするのか決まってるかね？

「デーク」

まだ分からねえが、生きてりゃ傭兵を続けてるだろう

「エキドナ」

なら、暇って訳だね？

「デーク」

？ああ

「エキドナ」

ちよつと話があるんだけどね、西方に新しく村をつくらうって計画があるんだよ

「デーク」

そりゃ、大そうな計画だな。

「エキドナ」

だから、その手伝いをして欲しいんだよ。

戦争で家をなくした人たちが安心して暮らせるように守ってやって欲しいのさ

「デーク」

そう言う事か。まあ、考えておこう

ディーク&エキドナA

「ディーク」

よう、エキドナ。何とか生きてるみたいだな。

「エキドナ」

ふっディーク、あんたもね。

「ディーク」

村作りの事だが、この戦いが終わった時に生きていたら、協力してもいい

「エキドナ」

そりゃ有難い

「ディーク」

それに…

「エキドナ」

それに？

「ディーク」

俺はあんたが気に入った。あんたみたいに美人で強い女、中々ないからな

「エキドナ」

へえ、嬉しい事を言ってくれるじゃないか。

「ディーク」

ま、そう言う事だ。死ぬんじゃないぞ

「エキドナ」

ああ、分かってる。あんたもね

デイク&ルウ（前書き）

ほのぼの会話です、イメージはロイドとニノ

デイク&ルウ

デイク&ルウC

「ルウ」

あっ！

「デイク」

！…ふう、おい坊主、大丈夫か？

「ルウ」

うん、ぼんやりしててつまずいちゃった、支えてくれてありがとう、お兄さん

「デイク」

怪我が無くてよかったな。で、こんな所で何をやってるんだ？

「ルウ」

僕はルウ。この軍で戦ってるんだ、宜しくね。

「デイク」

戦ってるだど？…誰かに戦いに加わるよう命令されたのか？

「ルウ」

ううん。あ！僕もう行かなきゃ。お兄さんの名前、教えてくれる？

「デイク」

デイク

「ルウ」

じゃあね、ディークさん。またお話しようね！

（ルウ消える）

「ディーク」

…いい子だな、何か理由があるようだが…

ディーク&ルウB

「ルウ」

ふう…

「ディーク」

ルウ？元氣ないな、どうした？

「ルウ」

ディークさん…あの、話…聞いてもらってもいいかな？

「ディーク」

ああ

「ルウ」

僕は、4つの時に両親が亡くなって、それからずっと弟のレイとリキアの孤児院にいたんだ。

でもベルンが戦いを始めて生活はみるみる変わっていった。

僕は、僕達をそんな目に追い込んだベルンが憎い

「ディーク」

そうか…

「ルウ」

でも、分かったんだ。ベルン人の中にもちゃんという人はいるんだって。

悪い人ばかりじゃないのに、それでも敵で、戦わないといけないんだって思うと…

ちよつと苦しくて

「デイク」

…敵だ、と判断したなら、戦う理由はそれで十分だ

「ルウ」

そんなっ…ううん、何でもない

「デイク」

お前の気持ちを否定する気はない。だが、戦うと決めたのなら前を向いて、

敵を倒して前へ進むんだ。わかったな？

デイク&ルウ A

「デイク」

ルウ、無事か？

「ルウ」

うんっ色々ありがとうデイクさん。デイクさんて、何だかお兄さんみたいだな。

…僕が小さい頃お母さんがよく話してくれたんだ。

母さんの義理の父さんと、二人のお兄さんの話。

血は繋がっていないけれど、本当の家族だったんだって

「ディーク」

そうか…

「ルウ」

その二人のお兄さんはね、一番上の人がロイドって言っただけど、お母さんが言うには大人で、優しくって頼りになって、かつこよくて自慢のお兄さんだったんだって。

僕は話で聞いたただけだけど、きっとディークさんみたいな人だと思うんだ

「ディーク」

それは買いかぶりすぎってもんだ。だが、血の繋がらない兄弟ってのは悪くない。

お前みたいな弟がいたらって考えると嬉しいぜ

「ルウ」

本当？嬉しいな！！ディークさん、これからもずっと仲良しでいようね！！

「ディーク」

ああ、もちろんだ。…しかしロイドってのは親父…？まさか、な

ウォルト&クレイン（前書き）

エトルリアの弓將軍、クレインに、弓を教えて欲しいと懇願するウォルト

ウォルト&クレイン

ウォルト&クレイン

「ウォルト」

あの、エトルリアのリグレ公爵のご子息ですか？

初めまして、僕、ウォルトと言います！宜しくお願いします！

「クレイン」

これは丁寧にも。私はクレインと言つ。

「ウォルト」

はい！

「クレイン」

同じ弓を扱う者同士、仲良くしてもらえると嬉しい。

「ウォルト」

はい！ところでクレイン様、その・・・。

「クレイン」

？どうしたんだい？

「ウォルト」

あ、あの突然なんですけど僕・・・クレイン様にお願ひがあるんです！

「クレイン」

どんな事かな？私に出来る事ならいいんだが。

「ウォルト」

僕に、もっと弓の事を教えて下さい！

ウォルト＆クレインB

「クレイン」

・・・どうして、弓を教わりたいんだい？君は、私から見ても十分優秀な射手だよ。

「ウォルト」

いいえ、駄目なんです！クレイン様みたいに、もっと強くないと…

「クレイン」

理由を聞いてもいいかな？

「ウォルト」

僕、ロイ様をお守りしないといけないんです。でも、僕はまだ未熟だから自分の腕に自信が無くて…。

「クレイン」

そうか・・・なら、役に立つかどうかはわからないが、僕がエトルリアで習った事を幾つか教えようか。もしかしたら君も既に知っているかもしれないけれど。

「ウォルト」

はい！よろしく願います！！

「クレイン」

まず、離れたところから一方的に攻撃できるというのが射手の最も優れた点だと言う事は？

「ウォルト」

はいっ習いました。ええと、それを活かす為に、物陰に隠れて射撃を行うのがいいと。

「クレイン」

そうだね。戦士を前に立たせて後方から射掛ける、距離があるうちに、矢をひたすら放つ。これは基本だね。それから・・。

ウォルト＆クレイン A

「ウォルト」

クレイン様、色々と参考になりました。本当にありがとうございました！

「クレイン」

いや、こちらこそ。

君と話していて思ったんだが、むしろ君に教えられる事の方が多いて驚いたよ。

君の師匠は優れた人物に違いない、名前を聞かせてくれないか？

「ウォルト」

ええと、僕の母が射手だったんで母から少しと、後は僕の母の幼馴染でウィルと言う人に・・。

「クレイン」

ウィルだつて！？もしかして、現在でもリキアで弓部隊を率いていると言つ…

「ウォルト」

ええ、そうですが？

「クレイン」

そうだったのか！彼の弓の腕が大陸1、2と称されているのを知っているかい？

「ウォルト」

そっそうだったんですか・・・本人が何も言わなかったので・・・。

「クレイン」

ウォルト、君に足りない物といえれば後は自信だけだ。もっと自信を持ちなさい、君の腕は十分通用するよ。

「ウォルト」

クレイン様・・・ありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167b/>

支援会話集

2010年10月11日20時50分発行